
はじめまして

陽依

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ハジメマシテ

【Nコード】

N7594T

【作者名】

陽依

【あらすじ】

以前にPixivに投稿した作品。

DdFF発売前に妄想した、ティータとユウナの出会いのお話です。

(前書き)

DDFFが発売される前に考えた作品です。実際の出会い(再会?)とは程遠いものなのでその辺をご理解した上でお読み下さい。

こんな出合いを、誰が望んだのだろう。

手にしていた杖を握り締め、召喚士であるユウナは顔をそっと上げた。

仲間とはぐれて辿り着いた場所は巨大な剣が中央に突き刺さり、周りを観客席が取り囲んでいるという何処かブリッツの試合会場を思わせるつくりになっていた。燃え上がる炎に照らされ、イミテーションが何体か確認できる。

物陰に隠れ、どうにか戦わずにすまないかと考えていたユウナの色違いの双眸にくすんだ金色がちらりと映った。はっと思わず息を呑むとそれを感じいたららしい金色の持ち主は動かしていた足を止める。ちやり、と胸元に輝くペンダントが乾いた音をたてた。

「……隠れてないで、出てきたらどうっすか？」

いつの間にか手にしていた海の色を切り取った剣を寸分違わずユウナが身を隠す方に向け、青年は不機嫌を隠さずに言い放つ。

「オレ、今、すっげー機嫌悪いんだ」

その言葉を皮切りに、漂っていた空気が一変する。

不穏な空気を読み取ったユウナが物陰から飛び出すのと同時に先程までいた場所が炎で包まれた。体勢を整えながら視線をすばやく巡

らせれば、『少女』のイミテーションがこちらに両手を翳している。急速に集まりつつある魔力に対抗するようにユウナは祈りを捧げた。

「お願い……ヴァルフアーレ！」

応えるように咆哮を上げ、現れた鮮やかな色彩の巨鳥は光を束ねるとそれらを一齐に放つ。逃れる隙も見出せず、『少女』は悲鳴すら上げられずに光に飲み込まれて砕け散った。

大きな翼を羽ばたかせ、くちばしを摺り寄せるヴァルフアーレの首筋を撫でながらユウナは離れた場所に佇む青年を視線を向ける。本当に機嫌が悪いのだろう、舌打ちを小さく打つ青年は青く澄んだ瞳を歪めてみせた。

「アンタ、コスモスの人？」

「キミは……」

「“キミ”じゃない。ティーダっス」

「そう。わたしはユウナ」

名乗り返してみると青年、ティーダはぱちくりと瞬きをした。まじまじとユウナとヴァルフアーレを見つめ、こてんと首を傾げる。その動作を不思議に思ったユウナが眉を寄せるとティーダはにんまりと笑って見せた。

「……そいつ、かわいいな！」

「え……?」

「何かいいもん見れたから機嫌直ったっス。あんがとな！」

くるりと踵を返して再び歩き出したティーダをユウナは慌てて呼び止める。だが青年は背中を見せたまま手を振るだけで足を止めようとはしない。ついには自らデジョントラップに飛び込んで姿を消し

てしまった。

戦闘になるだろうと覚悟していたのにも関わらず、見送る羽目になったユウナはティードダが消える瞬間に見せた悲しげな笑みが頭から離れずにいた。立ち尽くすユウナの手に頭を擦りつけ、切なげに鳴いたヴァルフアーレの声が後に『夢の終わり』と呼ばれる戦場で、静かに木霊する。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7594t/>

ハジメマシテ

2011年10月9日02時52分発行